

講義科目名（コース名）	テーマスタディ人文/e-learning
名前	中崎 温子

「テーマスタディ人文」は、25名の演習クラスである。Moodleを活用している第一の理由は、90分の授業枠を超えて有効活用ができるからである。学生は、期限内であれば自宅からでもレポートを送れる。教員側からもいつでも指示が出せる。設定をしておけば、厳格に締め切りを守らせることもできる。その他に、Eメールでは重過ぎるものでも、Moodleでは送受信できる。学生達の情報の検索に対する刺激や動機付け、ネットワーク化における技術力をつける機会ともなりうる。

教師用フォーラムの初歩的活用も行った。Moodle空間を、学生と教員、あるいは学生間で共有しあうことで、意見を整理し書くことの発信力を鍛える。面と向かっていないことの自由さもあるし、反面、発信者の特定ということで防御も働かせられる。今後は、毎週の簡易レポートもMoodleで提出させたいと考えている。

ただ、小テストなどもそうであるが、自力で書いたり解答したりしているのか、正味の管理が出来ない。「評価」を考えた場合、これが最大の難点である。

ところで、論題から少しはずれるが、この機会にMoodle上でのe-learningシステムのことを話題に載せておこうと思う。現在、国語分野のe-learningシステム構築を考えている。入学前の自宅での自学自習を狙いとしているが、リメディアルな内容に限定せず、生涯付き合う言語として、あ

る意味で、社会性（コミュニケーション力やリテラシー能力）を補完しキャリア支援にもつながる、いわば社会人前教育としての日本語（国語）力も視野に入れている。学生の日本語力の低下には目を覆うものがある。学部によっては、「学習法」「入門ゼミ」などで組織的系統的に初年次教育として位置づけているところもある。事態の重要性に対する危機感があるからである。こういった動きとの連環である。

Moodleでは、すでに市販の「日本語力検定」などの練習問題が利用できるようになっている。ただ、龍（2008. COM. Vol118 / No. 2）が指摘するように、外部コンテンツをそのまま利用するのでは、大学教育の中身そのものが問われよう。市販のものでは、教育理念に基づいた独自性と質の確保の担保という命題に応えられない。大学教育の場で扱うものは、学習時間増加、学習意欲が計れることのシステム化は無論のこと、対面効果に代わるものとしての解答者の思考経路が分かる出題内容や他の学問分野のベースとなる日本語リテラシーの養成とそのための豊かな題材の提供など、根幹に関わって吟味されなければならない。